

濁水かわら版

第108号 2021年4月4日

ポケ防止を兼ねて 中安 宏規

スペイン風邪から100年 14

日本の医療改革を本気で目指したサムス氏…

【…】はサムス氏の引用文(内容を概略した部分があります)

彼の実行力は現政府が学ぶべきものがある

Prolog サムス氏は1945(昭和20)年8月30日、マニラから駆逐艦に護衛された指令艦「スタージョン号」で来日した。指令艦の乗船者は【日本を攻略したアメリカ各軍の代表者に加え、イギリス・オーストラリア・オランダ・最近参戦したソ連を代表する上級将校らであった。彼らは1945年11月実施予定の九州上陸作戦の準備に携わって来た人々であった。さらに46年3月には関東平野に上陸する計画もあった…】。以上はサムス氏が「DDT 革命」に記した占領軍の中でのスタージョン号とサムス氏の任務の概略である。

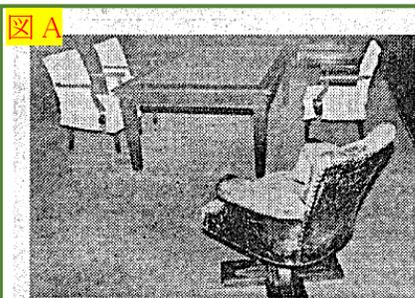
① サムス氏は横浜港に入港した同号が棧橋に着岸すると甲板の手すりにもたれて横浜の被害状況を見渡した。
【真正面の税関ビルは無傷であった。私が所属する前進総司令部が置かれるため特に関心を抱いて眺めた。鉄筋コンクリートの壁はペンキで黒く塗られていた。後でわかったことだが、夜間空襲を米軍機に見にくくするためだった。どのビルも黒く塗られて

いた。税関ビルは^{ひなだん}雛壇型で最上部の信号塔からおびただしい階段が地上とつながっている。それもどこかおかしい。一緒にいた技術将校が、鉄製の手すり支柱が地中部分を除いてすべて取り除かれていると教えてくれた】。

日本は日中戦争・太平洋戦争に備えアメリカから金属スクラップを輸入した。それを使い果たして国内金属に手を付け、日本中の建物から金属物は供出されたのだろう。私はサムス氏が横浜での第1印象から、【スチームラジエーター(蒸気暖房の放熱器)でさえ、建物から持ち出されスクラップ化し空き地に積み上げられていた。ビルディング・橋・工場から金属を剥がしとって使おうという状況に落ち込んでいた。戦争の最後の3年間は、病院にレントゲン写真はなく、そまつな印画紙に焼き付けていた】。サムス氏が記す「最後の3年間」は1943年ころから(注①)と推定している。

注① 同年の日本の年表を見ると、★2月ガダルカナル撤退★4月山本五十六連合艦隊司令官戦死・同女子勤労動員を閣議決定●7月実施★5月アッツ島守備隊全滅★8月朝鮮に徴兵令施行…等々。

総司令部東京に進出



図A (中安 宏規)

戦後を治めたマ元帥の遺産
「私は東京の下町、皇居のお粗の向かいにある第一生命ビルに司令部を設けた。かくて私は…八千万を超える日本国民の絶対的支配者となり…支配権を維持することに努めたのである」
『マッカーサー回想記』にごつ記されている第一生命ビル六階には、今もマッカーサー元帥が使用したイスと写真手前が残されている。
革張り。濃いグリーンの色は、ほとんどほげ、ちよつと見た目には白い革にも見える。幅六四センチ、背もたれの高さ八六センチ。クッションはやや堅めだが、背もたれに体を預けると、イス全体が大きくロッキングする。
マ元帥が当時、執務室、書斎、応接室の三室を使用していた。現存のイスは執務室用のものである。今年四月、テレビ出演のため来日した元GHQ職員、ペアテ・シロタ・ゴードンさんが記念室を訪れた。当時二十二歳で憲法案案づくりに参加したゴードンさんは、マ元帥のイスに座りながら「部屋もイスもテーブルも当時のまま。でも執務用には別の机を使っていた」と話したと



とテーブル写真集には「石坂泰三・第三社長が使用していた」とある。社屋の完成が一九三八(昭和十三年)落成に合わせて購入したといわれている。
四五年九月八日後、マ元帥は戦災を逃れた同社ビルを部下と共に下見し、接收を決めた。執務室の広さは四九・五平方尺。壁には英国人画家オルトリッジのヨット絵が二枚。ヨット好きの元帥が、同社のコレクションの中から選んだものという。
マ元帥が好んだ簡素な雰囲気は、リッジウェイ大尉、クラーク大將に受け継がれた。講和条約発効後の五二年七月七日に接收が解除になり、返還された。
第一生命は現在、執務室を「マッカーサー記念室」と名付け、マ元帥とリ大將から贈られた著書置き、役員が接待用に使っている。

② 図Aは、占領軍トップのマッカーサー元帥が皇居に面した第一生命ビルを接收した経緯と執務室のイスの話です。私は1992年11月2日から東京の夕刊に毎週1回「私はイス」というコラムを掲載しました。全46回の42回目(93年8月取材)に「戦後を治

めた マ元帥の遺産」と題した記事を書きました。巻尺を持参し椅子の大きさをメモし、写真を撮りました。マ元帥が自ら同ビルを訪れ、接收を決めた事や趣味がヨット。使用したイスやテーブルも同社のものを利用したことなど興味ある話でした。現在も6階に 次頁へ

GHQビル1階の評価 & 上級将校の宿舎帝国ホテルの実態

そのまま取材当時の状態で保存されていることを、第一生命に電話して確認しました。

図Bの写真は、マ元帥のイスを正面から見た写真です。探したらネガフィルムが残っており紙焼きしました。フラッシュ撮影で色の再現はできませんが、こんな感じのイスと思って戴ければ幸いです。



「ビルの1階は大部屋だ」

③ 1階にオフィスを構えたサムス氏は「DDT 革命」に次のように記しています。

【9月17日、総司令部は横浜税関ビルから東京に移った。第一生命ビルが接收された。これは濠をはさんで宮城と向き合う美しい高層ビルである。これだけでは足りないので農林中金ビル、明治生命ビルなど近辺のビルも接收された】

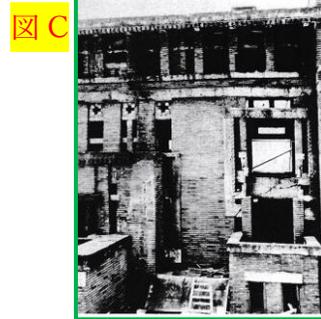
ここまで読んで私は「アメリカは占領を前提に皇居周辺の主要ビルを爆撃しなかった」感じを強く抱いた。横浜でも港に近いニューグランドホテルや高級住宅街を空爆せずに残している。そうした疑問を抱きながら、サムス氏の話の続けよう。

【10月2日、連合軍最高指令官総司令部 (GHQ) が設置されるに際して、私は GHQ 公衆衛生福祉局長に任命され1階に入った。…私の事務所がビルの4階から1階に移された。すると、私と接触していた日本人が言うのには、一番偉い人がビルのトップを占め、一番下の人たちが1階で働くよう大部屋にしてある。ささいな事でも、異なる文化や価値の基準を持つ人と付き合うには知っておかなければならない事柄である。私はGHQの上級将校なので、宿舎に帝国ホテルが割り当てられた。この建物は、アメリカの建築家フランク・ロイド・ライトの設計で世界的に有名なホテルであった。この黄色の煉瓦の、まとまりもなく広い三階建てのビルは、1923年の関東大震災にも見事に耐え抜いて残ったのだ。だが1945年の東京大空襲の火災からは、無償で逃れることはできなかった。建物の片翼と、舞踏室の内側は全焼していた】

アメリカの専門家は、建物の被害部分を建て直す意見だったが、価値観が異なり、最小の努力で最大

の効果を上げることに慣れている日本は反対。全焼した内部を修復する許可を得て修理したと、サムス氏は記している。

④ 関東大震災に耐えた帝国ホテルは、「帝国ホテルの120年」で次のように記している。「45年5月24日夜半から25日未明にかけ空襲を受け、400発の焼夷弾が投下された。南館客室の2階以上、別棟の総て、宴会場の大部分が被災し総面積の5割を超えた」。被害状況はサムス氏とは違う。図Cの写真は、「接收解除後の撮影したもので、この状況が



6年半放置されていた」と指摘している。

裸電球・ラジエター無し・ネズミ退治・軍用食で長期間耐える

⑤ 【そのころの帝国ホテルは、住むのに快適な場所と呼ぶにはほど遠かった。戦前の備え付けの家具はむろんのこと、絨毯まで取り去られて、代わりにメイン・ロビーと廊下の床には畳がしかれていた。部屋の証明は薄暗い裸電球一個で我慢せねばならず、その上、低周波交流電流のため、絶えず明かりがチカチカして、眼が疲れた。暖房もなかった。各部屋のラジエターは取り外されていたし、洗面所の湯は出なかった。夜になると滅入った。何百匹ものネズミどもが夜通し食べ物を探し廻っていた。ネズミどもが、引っ掻いたり、鳴いたり、喧嘩したりするため、堪りかねて、ネズミ退治作戦を開始、やっと厄介ものを退治した。食事はパリで修行したコック長が、米軍のC-レーション(Cタイプ軍用食)を使って驚異的料理を作ってくれた。冷凍肉と新鮮な野菜がアメリカ本国から送られて来るまで、われわれの食糧は何か月もの間、C-レーションであった】。

横道にそれたが、占領初期のサムス氏の日本での日常生活と仕事の環境である。 次頁へ

最も恐れられた天然痘の流行 & 免疫という言葉と見えざる特徴

⑥ マ元帥が第一生命ビル接收を決め開業するとサムス氏も東京に移った。初仕事は、軍から派遣されてきた平賀稔 大本営軍医部中佐と厚生省渉外担当の真鍋満太博士の3人でフィリピンから移転してくる米陸軍病院を探すことであった。彼は【日本全国4000の病院のうち1027病院が焼夷弾と爆弾で破壊された。残った病院の中から東京だけで3つの病院が必要だった】

航空写真で目標をしぼり、①聖路加国際病院(現在 同)②築地海軍病院(現在 国立がん研究センター中央病院)、③同愛記念病院、④聖母病院、⑤第一陸軍病院(現在 国立国際医療センター病院)を訪れた。米陸軍用に赤○数字の聖路加国際病院・築地海軍病院、第一陸軍病院の3病院の接收を勧告し、米国の陸軍病院となる。

⑦ 本国要請の仕事を終えたサムス氏は、日本の緊急事態解消に取り組んだ。かわら版 107号の「背丈の問題」も含まれるが、天然痘や発疹チフスの伝染病対策であった。

【野火のごとく急速に広がる伝染病の中で最も恐れられたのは天然痘である。占領第1年目で17000人以上の患者が出た。これに対処するため我々は、血清・ワクチン・抗生物質その他の薬品を外国から輸入するよりも、日本で製造する計画をたてた。一つには日本を自立させるためでもあった。また輸入にはドル為替が利用できなかったのも、アメリカの納税者の負担が軽くなるからである】

私感=私の感想 現在の日本は、膨大な予算で外国ワクチンの輸入に頼るといふ、自立の発想が全くないように感じますが、如何でしょうか？

【天然痘の流行を抑えるのに一番問題になったのは、占領初期に7300万人いた日本人に十分行き渡る量の有効ワクチンの製造が出来るかどうかであった。日本は戦前から天然痘のワクチンを製造していたが、すべての他の生産設備と同様に機能を停止していた。天然痘ワクチンは、貯蔵し、分配する際に適切に冷蔵されないと、直ぐ効力を失い役立たなくなる。そこで建物や人員の確保、ワクチン製造に使う子牛、そのエサまで手配した。

私感 当時は、ワクチンの冷蔵も輸送も困難でした。それを乗り越えた一方で、ワクチンが飛行機で到着するメディアの目線は、政府レベルのお手軽発想に見えますが…私の眼が悪いため？

【農家から子牛を入手したのに、ワクチンが製造されないことがあった。運搬する役人と受け取る役人は同じ県庁内にいるのに、受け取る役人が、ただ待っていたという連絡不十分が原因だった】

私感 この事例は今でもよくある事と思います。送別会には熱心でも。また熊本県では、担当の米軍医が日本の民間人にワクチン製造を委託したところ、その民間人が「ワクチンを販売し巨利を得ている」情報が入り、利益を返納させた事件が起きたと記してる。天然痘の予防接種は、約6000万人に接種した。

【天然痘は当然下火になるはずであったが、事実はそのようではなかった。ワクチンの有効性をテストした結果、効力を持っていた。私は地方を視察し、日本の古い法律に基づいて、接種する人の腕をアルコール消毒して、メスで4つの浅い十字をいれ、ワクチンがこの跡に広がるようにしていた。多くの人間に接種する際、アルコールが乾くまで待ってられない。ワクチンのウイルスは、アルコールに接すると死んでしまうので6000万人に接種したことになっていなかったのである。アルコールをそれ以後使わない事にして接種をやり直し天然痘の流行は止まったのである。

免疫は個別の疾病に対し特異的な抗体を作り出すことを含む生体の防衛能力である。常に相対的なものである。どの疾病に対しても生涯にわたって免疫が出来ることはない。①病原微生物が圧倒的な量であれば、常に破壊されやすい。通常自然に体内取り入れられている程度の病原体でも期間は限られたものになる。(別項で)アメリカでは多くの地域で天然痘の予防接種が、小学校入学時の必要条件になっている。②種痘がつけば一生の間の免疫が与えられたと想定されてきた。だが兵役についている者を調べると免疫が一生続くものでないと判り、三年ごとに接種された。しかし朝鮮に派遣された兵士に数百人の患者が出た。

私感 サムス氏の免疫説明に、私が①②を付けたアンダーライン部分は特に重要と思う。①は現在、コロナワクチンを接種すれば、9割以上の効果があるような雰囲気だがコロナは圧倒的に多い。接種を受けた女性看護師が「腕が上らくなり、当日休んだ」ことを家族が直接聞き話してくれた。②は米国で環境変化から免疫が消えた話。最近の副作用・副反応は、戦争中の撤退・転進に酷似している。次頁へ

ワクチン開発競争と制圧の難しさ サムス氏 人材確保の広告

⑧ サムス氏の話を進めよう。

【1941年、ドイツで顕微鏡を使い、発疹チフスワクチンの作成に成功したが、大規模な予防接種には時間がかかる。アメリカではコックス博士が、鶏卵にリケッチア(細菌より小さい微生物)を注入するコックス法を開発、大量生産が可能になった。日本にも導入されたが、戦争でニワトリが不足しており、ワシントンにエサ代を要求して物笑いになった。その説明に苦勞した…。日本の発疹チフスの多くは、北海道の炭鉱の朝鮮人強制労働者の間で起こっていた。第2次大戦が突然終了したとき、私はシラミ駆除とワクチン接種の拠点として、津軽海峡を隔てた連絡船の函館と青森を考えていた。この防衛線で発疹チフスの全国への流行を防ごうとしたが、2つの理由で実現しなかった。第1の理由は、朝鮮人たちは交渉がなされている間に反乱を起こし帰国することを勝手に決定してしまった。彼らは朝鮮に帰るために本州を通過して下関や門司港へ向かったが、シラミやリケッチアを持った彼らは、我々が日本に到着する前に日本中に発疹チフスを広めてしまった。(別項で)人の動きが盛んになると、流行は(野火のように)広がる。

★別項の「人の動きは…」現在でも同じ状況が見られ、野火を消せない。第2の理由は武器輸送を優先した点を強調。アンダーライン部分は、フィリピンでの諜報機関の情報を基に行動したと思われる。

★そこでかわら版107号でテキスト②とした毎日新聞刊「占領秘録」の「DDT と女一伝染病の大流行」の記事を紹介しよう。

砲弾と軍靴のあとにハエと女が従軍する。一というが、米軍が日本に進駐するにあたって、この二つは、自分達の軍隊を防衛する意味もあって真剣に取り組んだ問題であった。進駐軍という強権を武器にして、伝染病の大流行を防ぎ得たのだった。占領の面で一つの大きな功績だったと関係者は語っている。

占領軍、防疫課長に与謝野晶子の長男指名

東京の場合、いの一に都の防疫課長の人選を指名してきた。推薦された人は、かつてロックフェラー研究所の一員であった与謝野光博士(与謝野晶子女史の長男)だった。進駐と同時に都庁に対し、水道にクロールを入れろと命令した。(ここでは数値を省くが)通常より高い米軍の野戦の量であった。伝染病は1945年2月から発疹チフスと天然痘が猛威をふるった。東京だけで一万人の発疹チフス患

者と5千人の天然痘患者が出た。戦争中は風呂へ入ることが少ないために、中産階級の人たちにもシラミがわいたからだ。流行した原因は、戦争末期になって、朝鮮から北海道の夕張炭鉱を中心に労務者を連れてきたが、この人たちの間に昭和十九年から二十年にかけて、地域的小さな発疹チフスの流行があった。それが終戦になって、解放されたため朝鮮人は急いで帰国しようとし、東京や大阪などに泊まって菌をちらし、全国的な流行になった。防疫関係者は流行するだろうと予想していた。総司令部は、責任もあることだし、国民に不安の念を抱かせるというのと、米本国に対しても聞こえが悪いという理由で、発疹チフスの新聞記事については制限を加えた。発疹チフスの今までの対策は、衣類を熱湯で煮て、シラミを殺すようなことだったが、この時はじめてDDTというのが、米国から紹介されてきた。

ワシントンで自弁の人材募集広告

⑧ サムス氏は事前の準備を怠らなかった。荒廃した日本を立て直すため、指導者として150人のアメリカ軍医が必要と考えた。その人数は日本に駐在していたが、1945年から46年にかけて、米軍の終戦直後の縮小異動が行われ、彼はワシントンへ行き軍当局に若手の軍医を希望した。

【私は要員確保のためワシントンに行った。ところが陸軍軍医総監部の人事担当者から「私のプログラム実施に必要な人員補充は出来ない」と告げられた。そこで私は専門誌に自弁で広告を出し、医師会などの専門職団体に接触して医師・看護婦・衛生工学士や福祉面などの人材を民間から補充しなければならなかった。無駄だろうというワシントンの絶望的な予測に反し、私の努力は成功を収めた。私のスタッフを完全に決定して補充することができた。しかし意識的に規模を縮小、150人以内とし、彼らを県レベルに配置した】

★この本は時系列での執筆でない。日本占領と管理体系の決定・命令は45年10月2日に行なわれた。GHQの総ての組織が日本に移動を終えたのは46年1月である。しかし実際には、45年9月2日のミズーリ号での日本の降伏文書調印後、航空機からのDDT散布が行われた。次号以降もサムス氏が仕事を急いだ点や彼の考え、日本の戦後制度との関りなどを掲載します。